

單眼と散裂

神丸智華

```
:: import Flatness
```

```
#!/bin/ft  
# ens ex nihilo  
# amoralis laniare ex limitationem aruto per unitatis oculo
```

```
contents = [  
    (0) darkEnlightenment,      \ # p. 4  
        orthography,           \ # p.12  
        worUsage,              \ # p.13  
    (i) sickness,               \ # p.14  
    (ii) naïveness,            \ # p.16  
    (iii) Flatness,            \ # p.20  
    (iv) θεωρία,                \ # p.26  
    (v) muddiness/chaos/vouçphere, \ # p.34  
        regards                 \ # p.38  
]
```

```
while u == alive:  
    ens = eXtitize(nihil)  
    return ens
```

:: philosophicalAnarchism: Flatness

::

Ⓜ

✂

∅

# (0) 開眼 \_\_darkEnlightenment\_\_

当章は卑近な例を用いた本論の要約であり、読み飛ばしても支障は無い。

:: darkEnlightenment(self)

「現実」とは、猿がタイプライタで書いたハムレットよりずっと冗長でもう少し解像度の高いもの。

「虚構」とは、過密で退屈な「現実」があってこそ甘美に見えるもの。もしここに虚構しかないのなら……。

私たちはスクリーンに投影された映像を眺めているだけだ。誰が配役を決めているのか、俳優は実在するのか3Dモデルなのか、観客は知らないし、脚本があるのかアドリブなのかもわからない。

俗に「世界」と呼ぶところの、全体の一部として私やあなたがあるでしょう。肉体と精神と{あるいはもっと別なもの}のどちらを主体と見做すかは個体のもつ信念によるが、そのいずれをも含む全体を想定すれば、どちらにしても次のように書ける。

自己 ∈ 世界

自己(肉体) ∈ βιoσphere(世界)

自己(精神) ∈ vουσphere(世界)

{βιoσphere, vουσphere ∈ πασphere}

ここで「真理」が、自己(肉体 or 精神)を含んでいる全体(世界)の実態についての知識だとすれば、例えば、原子論や地動説などがそれに当たるかもしれない。

真理が眞理たるゆえんとは何だろうか？ 物理学者や哲学者といった権威が認めればいいのか、あるいは、そうしたものはエセで、啓示として神から享けることでそうなるのか。

現実が確乎として唯一に定まるのが、現実の基底に眞理があるためだとすれば、眞理が揺らげば現実も揺らぐ。

現実と虚構は区別がつかない、というのはつまり、現実とは虚構の一部だ、

::

あるいは逆に虚構とは現実の一部だ、ということだ。結局のところこれも「自己はどれを現実と認めるのか」という信念の問題に帰着する。

この「現実」は「真実」と読み換えてもよい。現実や真実は、個体がそれと信じるだけではそうなれない。他者か、あるいは神のような第三者によって承認されることで、現実には真に現実たりうる。

他者にも不審の目を向けるとき——他者からの承認を得ても真実と見做すには不十分であると考えるとき、信念よりもっと鞏固なものから承認を得ようとする。厳格で規則的な世界に生まれた人間は、意思をもつ権威よりも無意思の自然を信用する。現実や真実は確乎としてあり、自己はそれに従属するだけだ。そう信じると、次のような仕方でも無数にある虚構のすべてが棄却され、唯一の現実が採択される。

**ある者-Aが得た情報や知識をまとめて、そのうち正しいものだけを抽出して証拠とし、確保しておく。現実か虚構か判断のつかない幾つかの物語がAに提示されるとき、Aは証拠と食い違うものを切り捨て、一切撞着のないもの、あるいは、撞着があったとしてもそれをA自身の過失や錯覚として片付けられるものを、Aは1つ選び現実として採択する。**

しかしここで、謬ったものが証拠に混入していると、たちまち現実には確からしさを失い、虚構へと失墜する。これは「どの物語も等しく有力ではない」という混沌の顕現を意味する。

これが問題だとするならば、証拠の正謬はどうやって判断すればよいのだろうか？ どうすれば正しい判断をおこなったと言えるのだろうか？ 厳密な議論においては、「それが日常に即しているから正しい」というような素朴な感覚は通用しない。そもそも「日常」がどれなのかという議論をしているのだから。

例えば物理学は実験をおこなう。実験の結果だけが正しく、あるいは正しいものと信用し、現象として表せないものを証拠に含めることを禁ずる。これは仮説(theory)の検証(verification)であり、これをパスしたもの、正

当化/妥当化(validation)されたものが法則(眞理)と見做される。ある時点で妥当化された仮説は、しかし不断の検証に曝される。もし正しくないことが発覚すれば、その法則は直ちに取下げられるのだ。まさにこの不断の検証によって法則や原理の健全性が保たれるが、仮説の側がこの監査を受け容れることは反証可能性(falsifiability)と呼ばれる。(\*1)

物理学は上のように「正しい判断」を担保している。この担保が何故「正しい」と言えるのか、という問いには答えられない。それと言うのも、物理学が担保するのはそこまでだからだ。ここから踏み込むには、つまり物理学が主張する自然法則を眞理と認めるか否かの判断を下すのは、やはり個体の信念による。唯物論的な世界を、すなわち肉体の属するβoσphereを、あなたは現実と認めるのか、否か。

とはいえ、この議論の根はもう少しだけ深い。

現代の高度に発展した物理学は、ある問題に直面している。検証がおこなえないものに関して、具体的にマルチバース<sup>2</sup>の实在の可否や巨大ブラックホールの内部構造等々について、推測的にしか得られない知識について、これを法則(眞理)群に列してよいのか否か。先の言葉を使えば、反証不可能性をもたないものについて、物理学は正当化/妥当化の判断をくださるのか否か。判定に迫られているのだ。

直感的に、この解決方法は一つだとわかる。

反証されるまで、そうして立てられる理論のすべてをストックしておき、いつ反証されてもいように、通常の、反証不可能性をもつ法則群とは別けて置いておく。いずれ飽和しようとも、すなわち共時的に存命する物理学者たちでは捌ききれない量に膨れあがったとしても、逐次報告される観測結

---

\*1 厳密には、これは虚構を炙りだして認定する作業ではない。物理学にできるのは採択しないことであって、否認することはできない。

\*2 マルチバース(multiverse)：ヒトの棲む宇宙(universe)は単一のものではなく、時空間的に、また時に自然法則までもが断絶した複数/無数のuniverseが存在するという理論。現在の宇宙論の主軸であるインフレーション理論によれば、universeよりもmultiverseが生成される方がよりナチュララだとする。

果について、すべての理論を突き合わせる検証システムが必ず最適化され構築されるはず、と信じて。

このような、他の、これまでに検証の済んでいる証拠のすべてと整合するが、それ自体は検証できないもの、そのすべてを保持しておき、正規のものとして許容するわけではなく単に受容すること、これを**汎受容**と呼ぶ。ここでは物理学を例に取り上げたが、これに限ったものではなく、他のあらゆる文脈における正謬の検討に用いることができる。

意識に浮上するもの、そのすべては「情報」だ。

ある情報について正当性/妥当性を感じるとき、それを完全に自身で生成したと割り切れる場合を除いて、何かしら不可避の前提や制限を孕んでいる。卑近な例を見よう。

**目の前に林檎が置いてある。目で見だし、触ってもみたら間違いない。部屋の中にあるから突風で飛ばされるようなことはないし、何なら腐るまでじっと坐っていて確かめてたっいいい。**

「目の前に林檎が置いてある」というのが情報で、それを正しいと思う根拠は「自身の知覚器がそう告げているのだ」ということ。この主張が正しいのは、その者の知覚器が正常に動作していること、すなわち、そこに林檎があることを検知する能力がその者の知覚器にはあって、それが幻覚などの異常なしに機能を果たしている、という前提をもつときだ。厳密にはさらに、その者が嘘を吐いていないことも、もっと言えば、その者を欺きうるだけの、超心理学<sup>\*3</sup>的作用や未知の自然法則による干渉もないことも必要だ。

しかしながら、少し考えればこれらの前提のほとんどが客観的/絶対的に担保することが不可能であるとわかる。個体-**A**がこの林檎の存在を主張して、個体-**B**がそれを認める。この作業を地球上の全人口にわたって繰り返

---

\*3 超心理学 (parapsychology) : 既存の物理学知識では説明できない現象について、主に統計学的手法を用いて研究する学問。ここでは超感覚的知覚 (Extra-Sensory Perception) を考えている。

したとしても、それは客観的/絶対的な承認ではないからだ。(\*4)

この事実に照らせば、真に客観的な知識などどこにもないことがわかる。物理学の知識も別に普遍的なものではなく、これまで人類が観察してきた空間や時間の上ではそれが妥当であったというだけで、その範囲を超えて何も担保することはできない。(\*5)

**客観的なこと、絶対的なことは、何も知らない。  
我々はただ、情報をもつだけ。**

先の触れた「どの仮説も等しく有力ではない」という混沌、これこそ、何も謬りを含まないために最も素朴な状態である。「世界は之々のようにあるかもしれない」という言説を幾つ立てても、それを導いた証拠を幾つ並べても、主観性を克服できないかぎり、そのすべては等しく無価値である。

これが**Flatness**の地平である。ここに立つことで初めて、種族間(intertribus)の議論を妥当におこなう余地が生まれる。それはつまり、自己(種族)は何を知っていて、何を知らないのか、を踏まえることだ。

**種族**とは、経験を統合した個体群のことであり、学問知を共有している人類はこの一種だ。とはいえ、これは別に権威か何かに線引きされるものではなく、いつも独断的だ。

例えば迷路キットを使ってマウスの運動を観察するとき、実験者とマウスどうして経験を統合できたと考えられるなら、それらを種族として見做してもいい。他に、独我論の信奉者は意識や精神といった主体性を自分以外の誰ももっていないと信じているため、これは自身だけで種族を構成するよりない。

---

\*4 共時的にも全人口の検証はとても不可能だが、これに近似する作業をもって暫定的な客観性を賦与したことにすることはできる。言うまでもないことだが、この暫定的な客観性を賦与されたものが学問である。

\*5 「人類が観察する対象」が本当に人類の思考から独立に存在しているのか、つまり人間に観察されていないときや、人間が絶滅した以後でも、観察されていたままの姿で自然はあるのかについて、人間は何も保証できない。



Flatnessとは虚無主義の一種である。

我々の眼前には明らかに虚無がひろがっている。虚無とは、人間の営為の一切を無価値と認めるときに獲得されるもので、これと真っ向から対峙するもの、これこそが虚無主義(nihilism)である。自分は無力であり、無知だ。虚無主義者はそう知っている。

長らく、虚無は墓場と同列視されてきた。ここに踏み這入ったが最後、何も新たなものを汲みあげることではできないだろう、と。しかし、我々はこれを基礎として、ここから出立する。

本論「単眼と散裂」はFlatnessへの到達を促す書である。ここに到達せし者は、例えば以下のような議論を妥当におこなうことができるようになる。

- 自然法則はいつ崩壊するのか？
- 自然法則は時空間変化をするのか？
- 自然はもっと計り知れないほど莫大な次元数をもっているのか？
- 人間の棲む universe とは異なる自然法則をもつ universe が実在するのか？
- 観測可能な宇宙(Hubble surface limit)の外側に何があるのか？
- 分子は原子から構成され、原子は核子から構成され、核子はクォークから構成され...という階層構造は無限に続くのだろうか？

これらの問いへ正答することは難しい。

観測可能な時空間スケールを逸脱しているから、初めから詰んでいるのだ。

観測可能なスケールの内側に引き籠もっているうちは、世界＝自然界には有意な発見がたくさんある。虚無主義によれば、有意な発見など一つもない。そうした観察/観測は客観的/絶対的な知識を何ももたらさないのだから。

真理とは開示されるものではない。そう認めてしまえばいい。

真理を握っている、真理を決定するのが、神とか他の形而上学的な存在者だというのなら、我々はそれになる素質を十分に有している。Flatnessに到達した虚無主義者は、何も客観的/絶対的な知識をもたないことを知っている。だから、自身が「真理」と主張する理によって世界を構成するような僭越行為を平然と敢行できる。Flatnessとは、哲学におけるアナキズムだ。

VRやMRなど、世界を構成するツールは既にあるし、何なら、そういうツールすら創世行為を制限する枷として機能しかねない。

足りないのは没入感だけだ。

マインドアップロード。

加速する意識。

必要なものは創造すればいい。

**単眼**は我々が神になる法を示す。

**散裂**はrigidに見える因果のすべてを裁断する。

両者を携えた自己はあらゆる権威を滅して自己を解放し、

Flatnessのスフィア(生存圏)を構成する。

:: philosophicalAnarchism: Flatness

T  
•

X

⊖

>

U

+

↑

X

↖

## 記法 <orthography.ft>

論理の明瞭性のため、以下のような表記をおこなう。

「w」は語、「S」は句、「S.」は文、「Cs」は固有スケールにおける属性、  
「l」は名辞、「n」は数字を示す。

- w<sub>1</sub>/w<sub>2</sub> :** 同義を示す。両語について論理和を取り、より本質化する。どちらの単語を嵌入しても文が成立する。
- w<sub>1</sub> • w<sub>2</sub> • w<sub>3</sub>... :** 並列や列挙を示す。
- [S<sub>1</sub> | S<sub>2</sub>]:** パラフレーズを示す。どちらの句を嵌入しても文が成立する。
- (w), (S), (S.) :** 註釈を示す。直前の語または句について説明する。
- {w}, {S}, {S.} :** 冗長を示す。{}内を省略して文を読むことができる。当該文が前提とするものを共有していない者は{}内を文に嵌入するほうが誤読がない。
- 「w」, 「S」, 「S.」 :** 宙吊りを示す。まだ本文中で意味を詰めてないか、あるいは強調や留意を示す。
- "w"; "S"; "S." :** 借用を示す。本論とは趣を異にする定義/措定に由来することを明示する。
- w, S :** 太字は定義/措定を明示する。
- w 群 :** wの複数形を示す。「w{群}」と表記する場合、wが単数でも文は成立する。
- Cs\_w-l :** wについて、当該文における属性Csを明示し、インスタンス化したもの。本文中では必ず英太字斜体で名辞(ラベル)「l」を賦与する。簡略のため、明示以降はラベルで示す場合がある。
- S. (\*n), w^n :** 註釈を示し、頁下部において詳述する。

## 語用 <wordUsage.ft>

以下の語を事前定義し、集合論/圏論を素地とした存在論による論述をおこなう。

- 対象:** 射\_文が構成されるとき、ドメイン\_自己に対してコドメインに置かれるもの。「{自己に}対象化可能」とは、「それ」(対象)について射\_文を{自己}が構成可能であることを指す。
- Res:** 文によって対象化される以前の対象。これは当該文のメタにおいて対象化されている。その文では対象化されていないものについての記述を可能とする。
- 圏:** そのスケールにおいて1つ以上の要素を含むもの。{射やスケールを含め、}すべての対象は{自身を要素として圏を構成できることから}圏である。
- 要素:** そのスケールにおいて圏に含まれるもの。
- 含む:** 圏と要素の関係にある2対象について言う。圏-Aが要素-Bを含むとき、これは「 $A \ni B$ 」と表記できる。
- 射:** 任意の2対象を[結びつける | 関係させる]もの。矢印の前に置くものを「ドメイン」、後におくものを「コドメイン」として区別する。ドメイン-Doとコドメイン-Coを結ぶ射-Mは「 $Do \dashrightarrow(M) Co$ 」と表記できる。
- スケール:** ある文において対象が圏であるか要素であるかを決定する基準。1つのスケールをもつ文は「モノスケール」であり、2つ以上あるいは0つのスケールをもつ文は「マルチスケール」である。
- 属性:** 対象の分類、圏・要素・射・スケールを言う。なお、一切は圏であることから分類の意味は薄く、これに関しては便宜上のものである。
- 自己:** 系を構成可能なもの。
- 系:** 1つ以上のスケールをもつ圏のこと。
- 操作:** 何らかの系について「操作可能」とは、その自己が当該系へ任意の対象を要素として加えることが可能であり、かつ、系中の対象について文を構成するさいにスケールを任意に設定できることを指す。
- entity:** [含む要素のすべてについて自己(観測者)が既知の | 境界をもつ]対象。静的な対象。entityとして対象化することを「定義」と言う。
- eXtity:** [含む要素のすべてについて自己(観測者)が既知ではない | 境界をもたない]対象。動的な対象。eXtityとして対象化することを「措定」と言う。

# (i) 導入 \_\_sickness\_\_

全体について無知であるはずの種族、当然のように前提されている全体

:: humanTribus.remove(sickness)

「世界とは何か？」という問いについて、いわゆる認識論の問題として提起することは泥々たる混迷の始まりである。意識をもつ人間は、世界それ自身およびそれについての思考との手続き(相互関係 correlation)についての議論に終始せざるをえないためである。この文脈で観想される"世界"とは、伝統的な理性主義に由来するものである。すなわち、古代ギリシア産の"イデア"や、ライプニッツ栽培の"モノイド"、それらから離れようとしたが明らかに換言でしかないカント製"物自体(Ding an sich)"など、{意識による}認識に先だって存在すると考えられるもの(以後、本文ではこの個物について{必ず括弧付きで}「それ」と言う)、それら存在の全集合が"世界"である。この視座の致命的な謬りは、{相関主義者が正しく批判したように}本来的に「それ」について[アクセス | 接触]不可能であるにも関わらず、その存在を確信して疑わないところである。よって、こうした視座は「それ」群の存在を前提する仮説として扱うことが妥当であり、「直観(intuition)」など{疑わしいもの}に頼って正当化することは不要である。「それ」がもしあれば仮説は妥当で、なければ妥当ではない。ここで、「それ」の存在について確かめる手段を人間はもたない。

また、一般的な語用において「世界」が指す対象は様々である。下へ大摺みに例挙してみよう。

- ある者にとって「世界」とは人間社会そのものである。このとき「世界の終焉」とは人類の滅亡や地球の崩壊と等しい。
- ある者にとって「世界」とは太陽系そのものである。このとき「世界の終焉」とは例えばブラックホールに惑星群が吞まれてしまうことに等しい。
- ある者にとって「世界」とは宇宙そのものである。このとき「世界の終焉」とは例えば巨大なブラックホールに一切の星々が吞まれてしまうことに等しい。

ここで言えるのは、「世界」とは全体であり、それは個々体の生活や体験に即している、ということである。

本論は、{無用なバイアスやイドラにまみれた伝統的な}哲学的語用および一般的語用から本質を抽象して、「世界」を「{自己に認識しうるかぎりの}[一切有 | 「有」であるもの一切] | 「存在するもの」一切}」として定む。ここで「有」とは、存在の欠如としての「無{そのもの}」を含む、「存在」のことである。「存在」とは自己に対象化可能な対象のことであり、「存在する」とは自己に対象化可能であることが確かめられたことを明示する語(動詞)であり、何が[存在するか | 対象化可能であるか]は自己の固有性による。{この固有性は、「個性」と言い換えてもよい。感覚や信念によって、他者とは異なるものが感じられたり、信じられたりすることによって、構成される{存在論}系が多様性を帯びることを指す。人間種族の主観で体験/経験から[外部 | 外界 | 世界]を{遡及して}語る場合には[通常の | 健全な]感覚から疾病や化学物質に由来する幻覚の類いが排除されるが、これは種族として経験を統合し、総和を取ることで少数の[報告 | 体験]を炙りだして切り捨てることで可能となる。}

世界を上のような対象と定むとき、これは自己の{存在論}内で閉じる。{「世界は無限である」などと開いた対象として措定する場合は別であり、第4章で詳述する。}このとき、如何にして世界は構成されるのか、如何にして世界は拡張されるのか、について次章より検討する。

# (i) 存在論 \_\_naïveness\_\_

「それ」は存在する。なぜなら私は「それ」が存在することを知っているから。

世界とは[一切有 | 明示的に存在するすべての対象を要素にもつ圏]である、と定義しよう。ここで、自己(主体)に対象化可能なもの{だけ}が存在するとすると、対象のすべては主観的に存在を認められ[た | うる]ものであり、[客観的に存在することが確かめられた | 絶対的に存在する]ものではない。自己に対象化可能なすべての対象を要素としてもつ圏を**全存在**と呼ぶと、これは{前章で見たような}"世界"と[一致する | 同等の要素をもつ圏]だろうか。( \*6)

{人間種族に卑近な例を挙げよう。自己(人間個体)-**A**および自己(人間個体)-**B**がある。**A**は「ユニコーンが存在する」ことを確信している。この確信は、「自然界にユニコーンが棲息している」というものでも、「架空の動物としてユニコーンは文化のなかにある」というものでも、もっと別のものでも構わない。対して、**B**は「ユニコーンは存在しない」ことを確信している。この確信についても、「自然界にユニコーンは棲息していない」というものでも、「架空の動物としてユニコーンはあるが、それを存在として認めない」というものでも、もっと別のものでも構わない。このとき、**A**の全存在にユニコーンが要素として含まれるが、**B**の全存在には含まれない。このとき、**A**あるいは**B**の全存在は"世界"と一致するか、あるいは"世界"の部分(全存在 $\in$ "世界")となるだろうか。}

複数の自己(**A, B, C...**)を考えると、各々のもつ全存在(**S<sub>A</sub>, S<sub>B</sub>, S<sub>C</sub>**)が一致しない場合がある。この不一致は、経験<sup>\*7</sup>の差異および存在についての

\*6 整理のために言っておくと、世界 $\in$ 全存在であり、区別すれば「全存在」が可能的(非明示のものを含む)であるのに対して、「世界」はアクチュアル(明示のものだけを含む)である。

\*7 経験：瞬間的なものを「体験」、それを通時に総和したものを「経験」と呼ぶ。理想的には、経験を保有する自己は[忘却しない | 体験したすべてを経験として保有する]。人間種族においては、通時かつ全個体/全要素にわたって総和をとったのち、{幻覚など}認定基準に満たないものを切り捨てたものを経験と言う場合が多い。



信念 {「何が存在するのか」} の差異に起因すると考えられる。それぞれの自己は、それぞれ異なる {存在についての} 認定基準をもつことが予想されるため、例え一致した経験をもつ自己どうしであっても、全存在が異なることがある。

この差異/不一致は主観的なものであり、個別の {自己がもつ} 全存在は、理性主義者や相関主義者などが思考や観察/観測に先立って存在すると考える [完全に客観的な | 絶対的な | 思考や観察/観測によることなくそれ自身である] "世界" とは何ら干渉しない。しかし正しく言うと、この "世界" さえも経験から構成された [概念 | {理性主義者/相関主義者である任意の自己の} 全存在の要素の1つ] に過ぎず、これがもつ {言葉の上での} "客観性" とは、理性主義者/相関主義者である任意の自己によって賦与されたものである。したがって "世界" は [主観的 | 自己 (主観者) に操作可能 {な対象}] でしかありえない。経験主義者や唯物論者は "客観的な" 証拠を集めて、「自己の外部に何某かが存在していて、それらすべてを包含する全体として "世界" がある」と言うが、これについても同様で、この "世界" の "客観性" も経験主義者/唯物論者である任意の自己によって賦与されたものでしかない。

ここまで、意図して「存在」という語の定義を避けてきた。これは必ずしも {全存在中すべての要素 (存在) について} すべての対象化の作業を自己 (主体) の [意図によっておこなう | 明示的な手続きを経る] わけではないことから、本来的にこの語の定義が困難なためである。自己によって存在についての信念は異なり、この信念は必ずしも文として構成可能とは限らない。(\*8)

しかしながら、以上の語用では「存在」は多義的に過ぎる。そこで、自己 (構成者) が存在についての信念を [明示 | 意図/意志によって決定/劃定] し、そのような {自由に書き換え可能な} 基準をもって Res の「存在」の可否を認定するとき、この「存在」を **実在** と呼ぶ。ここで **現実** を「ある単一の信念下で実在するすべての対象を要素にもつ圏」として定義すると、これは人間種の素朴な語用感覚における "現実" とほぼ等しいだろう。が、「自己が実在

---

\*8 これを構成可能な自己には、例えばリレーショナルデータベースの構成者が挙げられる。これにとって存在とはレコードに等しく、存在についての信念はレコードの構成要件に等しい。{無論のこと、この「構成者」は人間個体 (設計者) ではなく、全存在が当該データ群に等しい自己を指す。}

として対象化可能なすべての対象を要素としてもつ圏」である**全実在**と現実とは必ずしも一致しないことに注意する。(\*9)

{先の例では、「ユニコーンは実在しないが存在する」と言うことができる。}

全存在は全実在と包含関係にある(全存在 $\supset$ 全実在)が、全存在に含まれて全実在に含まれない対象には、人間種族では例えば「経験的に検証可能であること」を実在についての信念として、意識による思考や幻覚によって体験される事象/物体が挙げられる。あるいはまた、{基準次第であるから}理性主義者は[「神は実在する」と言う | 神を全実在に含む]ことができるし、任意の自己群(種族)が同一の現実を共有すること(\*10)も可能である。

世界および現実が主観的にしかありえないのは、ひとえに種族が[外部に接触することができない | 全存在を超えて何も対象化できない]ために客観的/絶対的な経験や知識を得られないことによる。人間種族について言えば、素朴には[情報 | 体験/経験・思考・幻覚体験/経験など]のみがある。ここで言う「素朴さ」とは、判断や推測によって加工/拡大解釈されていないことや、その本来性によって文として構成不可能なことを指す。情報が一次に得られるものであるのに対して、知識は必ず二次以降に得られるものである。

例えば、論理学や物理学によって素朴な体験/経験が加工されると、目の前で観察/観測された物質/物体の挙動が、{自己(観察者/観測者)に観察/観測<sup>\*11</sup>可能な範囲を超えて}すべての時空間に亘って再現されうるだろうということが演繹的/帰納的に知識として得られる。

あるいはまた、文として構成可能なものはすべて知識である。{例えば「シカがヘッドライトに照らされている。」と文に起こされた光景は、自己(筆者)がその場で見た光景[の捨象である | から情報が幾らか削ぎ落とされている]。さらに言えば、自覚的に体感可能な感覚だけが、体験としてもたら

\*9 実在についての信念が複数ある場合、現実がその数だけ構成されるのに対して、全実在はそのすべての信念によって構成される実在を含む。

\*10 これこそが「経験の統合」である。

\*11 観察・観測はどちらも「observe」の訳語であるが、ここでは、[デジタル化 | 測定機器による変位などの数値化]を含むobserveを「観測」、それを含まないobserveを「観察」として区別する。

されるものではないかもしれない。(\*12)}

附言しておくことには、知識およびそれに基づく現実には複数の自己(個体)の情報を統合して構成することが十分に可能であり、統合される個体数が多ければ多いほど、[知識の妥当性がベイジアン的<sup>\*13</sup>に高まる | 幻覚体験/経験として無効化され切り捨てられる知識に対して、篩いに残った知識の確からしさが高まる]ということである。{これは例えば、天動説の有効な現実より地動説の有効な現実の方が人間種族にとっては確からしい現実である、ということが天文学的な観測によって不断に検証されていることが挙げられる。}最も確からしい現実こそがその種族のもつ現実であるとすれば、これは概ね一意的に定まるだろう。とはいえ、必ずしも個体(∈当該種族)のもつ現実と、その種族のもつ現実とが一致していなくともよい。

本章を整理して言おう。

存在が本来的なものであるために、存在についての信念「何が存在するのか」について定義不可能な場合があるのに対して、実在は自己に定義可能な対象であり、任意の実在の可否(「それ」は実在するか否か)を自身で決定/劃定することができる。また、すべての実在は存在としても対象化可能であることから、現実∈世界、全実在∈全存在である。存在と実在のいずれも主観的に構成されるのみであり、本来的な情報から遡って何らかの知識を真に客観化/絶対化することはできない。{正しくは、情報が何らかの絶対的な存在者によって与えられていることを予期する「遡る」という感覚は錯覚である。}

---

\*12 例えば(\*3)で触れた超感覚的知覚(Extra-Sensory Perception)がこれに当たる。

\*13 ベイジアン(Bayesian)/ベイズ統計学的：ベイズ統計学においては、標本全体(母集団)について未知(部分的に既知)であるときの確率(尤度(plausibility))を算出することができる。ここでは、前章で触れたように全体について未知である種族が、自身に既知の知識から全体の部分を正しく再構成できていることを前提するときに、全体についての解剖が着々と進行する、ことを指す。

## (iii) 汎受容 \_\_Flatness\_\_

虚妄に一切干渉されない世界に生きてるなんて、お前正気か？

∴  
reduction(wisdom)

素朴には情報のみがあり、これと"現実"や"世界"との隔たりとして知識がある。これは種族に所与とされる経験を全体としてそこから捨象<sup>14</sup>されたものであり、人間種族には具体的に自然法則や数学/論理学定理などがある。種族はこれらを生活や自然界の観察/観測に適用し、そこに齟齬をきたさないかぎりそれらの知識は有効/妥当である、と言う。ここで物理学者が「原理(principle)」と、論理学者が「律(law)」と、それぞれ{それが正しいかどうかは検証不可能だが自明とする}出発点とするものは、いつ破綻しても不思議なことは何もない。加えて言えば、その破綻に直面したとしても従前の自然法則や定理群を抛棄する必要はまったくない。というのも、{{光速から十分に小さい、プランク定数周りの諸値を無視できるほどサイズが十分に大きい、など}限られた時空間スケールのみで有効な「古典物理学」の位置にニュートン物理学を収めたのと全く同様に}ただ自然法則が時間変化するものとして旧来の知識を拡張すれば良いからである。

この破綻の想定のように、自身のもつ経験が「全体」でなくなる場合を考慮に入れる立場は、一般的に「懐疑論(skepticism)」と呼ばれる。これは経験論の一種であるが、種族自身のもつ経験を全体として「"現実"や"世界"は、すべて自己に既知のものによって構成されている」ものとする一般的なそれからはやや異端視されている感がある。

とはいえ正しく言えば、懐疑論とは{実在論や経験論などの}加工的ないずれの派閥にも属さない、最も素朴な視座である。本章では、客観性/絶対性にまつわる飛躍によって形成される、存在/実在に対しての種族における偏見(bias/idola)について見てゆく。

---

\*14 素朴には、圏から要素を除外して名辞(ラベル)を変える操作を捨象と、圏から要素を抜き、その抽いた要素で新たに圏を構成する操作を抽象と呼んで区別する。ここでの語用(捨象)は、例えば10mから10cm刻みで変えた高さから林檎を落としてゆくデータ(経験)から、その地点における重力定数を算出する過程について考えるようなものである。

{自己によって対象化される}あらゆる存在は、ただ自己(主観者)が構成することによってのみ存在する。したがって「自己へ情報を与えているものこそが"世界"である。」と言うことはできても、この"世界"は{そうした存在の1つに過ぎないため}何ら客観性/絶対性をもたない。これはまた、無論[独我論|"世界"/"現実"には自己のみが実在する、という言説]のようなものを否定する有効な手段を種族はもたない(\*15)、ということでもある。

独我論に対置されるのは、自己-Aが自己-Bの実在を認めて互いの経験を統合し、外部/外界(≧A, B)が他に何を含んでいるのかを探ることができる立場であり、これを広義に経験論/経験主義と見做す。

例えば両者は下のように分類することができる。

- **独我論:** 経験{は自己(個体)しかもたないため、これ}を種族単位で統合することはできない。
- **強い経験主義:** 経験は種族単位で統合することができる。"現実"や"世界"は、すべて自己(種族)に既知のものによって構成されているとする。
- **弱い経験主義:** 経験は種族単位で統合することができる。"現実"や"世界"の一部は、自己(種族)に既知のものによって構成されているとする。
- **広義の経験論:** 経験は種族単位で統合することができる。"現実"や"世界"は何から構成されていてもよい。

注意すべきは、この経験論の広義性である。これは一般に経験論と相容れないとされる理性主義や相関主義などのエッセンスを含んでいる。というのも、それらの立場における{イデアやモナドなど}[経験より根源にあるもの|自己に経験をもたらしているとされるもの]は、その発想からしてこの広義のスキームにおける経験に還元できるためである。すなわち、素朴にある情報/経験のために、理性主義者/相関主義者は[そのような知識|自身情報/経験をもつのは、絶対的/客観的に存在する根源的なものがあるためだという主張]をもっているのであって、それは経験論者や唯物論者が、科

---

\*15 そのような圏が構成可能なため。もちろん、客観的/絶対的には肯定も否定もできない。

学的な観察/観測から物質の客観性/絶対性を認める操作と何ら変わらないものである。

以上のような立場をとる広義の経験論は、その本質から、以降は**経験還元論**と呼ぶ。種族におけるあらゆる知識や"現実"や"世界"の構成のされ方が、これによって以下のように説明できる。

[限定された | 客観性に欠いた]情報に基づいて種族が試みる、すべての客観的{と種族自身によって考えられる}知識は、真に絶対化されることはなく、ただ種族の信念によってそれが[[正当と思われる | 正当化される] | {真に}絶対化された知識を自身もっていると考えて、体験/経験と照らして何ら不和/不一致のない状況が{{種族に観察/観測可能なかぎりの}全時空間に亘って}ある]だけである。{人間種族について言えば、「自然法則が宇宙の全時空間に亘って機能している」ことは検証不可能であり、そもそも恒常的随伴<sup>\*16</sup>と因果<sup>\*17</sup>について区別することはできないことから、そうした{擬似てきに見出される}根源へ実在の挙動を還元することは、{それを操作によって許す}特定の文脈においてのみ妥当である。}自己に構成されるすべて(実在)は、自身のもつ情報{およびこれによって副次にもたらされる知識}の中で完結している。

さらに踏み込めば、一般に「正当化」「妥当化」および「絶対化」と呼ばれる操作が、実際には何をしているのかを以下のように説明できる。

主観者(種族)は、次の方法で[絶対化を可能である | 真に絶対化していると思込んでいる]と言える。

まず、情報(経験)を基にした実在の定義をおこない、それに即した現実を構成する。続いて、情報(思考)を基にした、実在に先立つものとしてのメタ実在の定義をおこない、それに即したメタ現実を構成する。メタ現実における何物も自己-S( $\in$ 現実)には操作不可能である{と{構成者が}定めるが、実際には自己( $\ni$ S)に現実とメタ現実のいずれも操作可能である}ために、実在の根源としてのメタ実在を絶対化することが可能である(\*18)。絶対化とは、言って

\*16 恒常的随伴(constant conjunction): 現象-cがあらわれれば、経験上は現象-eが伴ってあらわれること。必然性を予想するものの、絶対化をおこなわず、偶然性と手を切ることはない。

\*17 因果(necessary connection): 因-cの作用によって果-eが必ず生じる。必然性の正当化または絶対化{ $\wedge$ n(後述)}を指す。

\*18 理性主義的には、まず人間種族の観測によらずに客観的/絶対的に存在する{アイデアやモノド

しまえば[絶対的/客観的な | 自己に操作不可能な]任意の対象の存在を認めることであり、正当化/妥当化がその認定への自己の意図/意向に自覚的であるのに対してこれは非自覚的であるという点で両者は区別できる。

以降、このような絶対化{と種族自身が思い込むもの}を絶対化<sup>n</sup>と表記し、真の絶対化と区別する。(\*19)

正当化/妥当化は、メタ<sup>n</sup>現実の構成について自覚的であるという点で絶対化<sup>n</sup>と区別される。正当化/妥当化をおこなう場合には、メタを構成するための方便として必ず前提を立てることを要求される(\*20)が、この前提を呑む現実が自己のうちで構成され、それと"現実"とを同一視することによって、{真に一体であるのではなく、単に同一視をおこなっていることが曝かれるまで}暫定的に、その正当化/妥当化が"現実"に対しておこなわれているように錯覚されるのである。この場合は、ここで言う「現実」がメタ<sup>n</sup>現実で、所与であるとされる「"現実"」こそが有効化される現実である。

これによればまた、独我論を[否定 | これが謬っていることを{真に}絶対的に断定]することができないのと同様に、"現実"や"世界"を構成するあらゆる論法を否定できないことが明らかである。

例えば形而上学で対象化される神的概念は、それが唯物論的に実在しない経験的証拠をあつめることはできても、その経験を捨象して構成される現実においてその神的概念が実在しないことを言えるだけで、それ以上は何も定めて言うことはできない。加えて言えば、これはもちろん[肯定 | それを実在する現実を真に絶対化]することもできないが、それはともかくとして神的概念が実在/存在する系は思考可能/構成可能であり、例えば自然界の現象群の因果的根源に神的概念の干渉を予想することで実際にそうした系/現実を構成することができる。

つまり種族は、構成可能なあらゆる[物語 | 現実/世界の有り様]について肯定も否定もできず、ただそれらの構成可能性を認容するよりないのである。

に基づく} "世界"があり、それらと理性(自己)が何らかの方法で接触すると、その表象として近似や例化された"世界"が現れるとされる。これらの"世界"について、前者が「メタ現実」であり、後者が「現実」である。

\*19「<sup>n</sup>」という表記は、こうしたメタの構成は多重に何度も(数学の慣例に従ってn回)おこなうことができることに由来する。屢々、自己は自身が何重目のメタにあるかについて意識しない。

\*20 人間種族で言えば、例えば、自然界の対象群の挙動を決定している自然法則を正当化/妥当化するときに、「自身に観察/観測な範囲において」という前提を必要とし、「理想的には」という枕詞を用いてメタ<sup>n</sup>で文を構成することを明示している。

[経験への還元 | 自己(主体)に構成される一切の主観的な現実/世界へ、それまで形式の上で正当化/妥当化/絶対化されていた"現実"や"世界"を還元すること]に加えて、そうして構成されうるすべての対象を認容すること、この汎受容性をもって種族はFlatnessに到達することができる。

Flatnessによれば、つまりこうだ。

素朴さ/本来性ゆえに真偽や絶対相対の審議をおこなうことができず、また如何なる記述をおこなっても同等のものを複製しえない情報(体験/経験・思考・幻覚体験/幻覚経験など)が所与としてあるのみで、"現実"や"世界"といった自己(種族)( $\in$ 現実)に操作不可能とされる絶対的<sup>n</sup>な対象はただメタ<sup>n</sup>現実に対象化されるだけだ。

それが種族に定立せらる"現実"や"世界"のすべてであり、例外はない。

根源的と思われていた一切が情報に還元される時、これを虚無への覚醒とすることがあるかもしれない。一切は個体の妄想と見別けがつかないのだから。しかしながら、そうして辿り着いたここは墓場ではない。すべてのニヒリズムが自殺宗教であるわけではないということだ。

Flatnessの地平では、種族に固有なあらゆる偏見(bias/idola)が曝かれ、その無効化を望む者は無効化をおこない、偏見下の"現実"や"世界"を肯定するものはそれを肯定する。現実の構成にまつわる言説は交雑を無限に繰り返して有限と知る無限を玩弄し、あらゆる真の絶対化を不断に拒む虚無の湖縁で、素体(\*21)では叶うはずもない多種族との交歓の時を待ち受ける。眞理が自己の有り様を客観視する法であるのなら、この袋道がそうだ。

---

\*16 素体(blank): 発生的に本来的であると見込まれる、生身の身体。素体は五感のみをもつが、計量的手段はそれだけではない。電子工学的につくられる種々のセンサにより、人間素体は放射線・超音波・重力波などを知覚することができる。区別するとき、前者を単に「知覚」と、後者を「拡張知覚」と呼ぶ。



:: philosophicalAnarchism: Flatness

⊕

И

X

X

П

X

∧

И

☺☺

# (iv) 単眼と散裂 \_\_θεωρία\_\_

文法規則を借金もるとも踏み倒せるのは、文學者だけだ。

::  
θεωρία(tribus)

本章では、Flatnessの地平に立って思考する際の記述様式を扱う。

自然言語は、"現実"や"世界"に実在するものやその挙動について命名し、自己間の伝達を可能とすることを主意として発達したものである。そうした物象的な現実から離れ、思考可能なすべての系を言語によって構成しようと思えば、これの抽象化が必須だ。とはいえ、人間種族の外部、他種族を真に射程に捉えるとき、我々は言語記述が有効/有意でなくなる特異点に遭遇することになるだろう。

本章までに定義してきた通り、[現実 $\in$ 世界 | あらゆる現実を含むものとして世界があるの]であって、その逆ではない。ここで注意しておくことは以下の2点である。

- **現実/世界は必ずしも情報の捨象ではない。** 実在の様式(何が実在するか)を定めれば現実には構成される。よって例えば、自己に筆記されることを実在の様式とし、3つの記号(+, -, x)をそれぞれ実在として紙面に書き表すとき、この紙面こそが現実である。{ここで自己はメタ現実にあると言える。}
- **また、両者は必ずしも区別されえない。** その自己にとって対象化可能であるすべてのものが実在するとき、[現実と世界は一致し | 世界が現実のみを唯一の要素にもつ圏であり]うる。例えば、人間種族は{実際の観察と突き合わせるための思考的な}概念をもつために現実と世界が一致しないが、計算機プログラムにおいてはin-situにインスタンス化したオブジェクトしか対象化されえないために現実と世界が一致する。

情報への由来如何に関わらず、存在は実在と較べて本来的なものであり、

存在の様式(何が存在するか)について屢々定義することが困難である。従って、{様式の定義が必ずおこなわれる}実在のみを、種族内(inner-tribus)で構成した対象群の伝達では扱い、Resを実在として対象化/構成する{、人間種族の場合は{文字および画像を含むデジタル/アナログ込みで表現可能な}データによる}一切の記述様式を言語と呼ぶ。{ここで独我論的な種族(個体)については、{種族内の伝達に際して文字などの媒体を必要としないため}存在の記述が容易におこなえることがわかるだろう。}

表記法や統語法など、言語による記述をおこなう際に当該言語が固有にもつ構成様式を言語規則と呼ぶ。言語は無数にあるが、{"現実"の経験に強く従属する自然言語}より本質的なものでは、例えば次のような規則群をもつものが成立する。

対象(実在)がある。ある「スケール」において単一と見做せるものを要素と呼ぶとき、[複数 | 1つ以上]の実在を要素として含む対象は圏である。対象が要素であるのか圏であるのかを包含状態と呼ぶとき、スケールとは、記述のさいに対象の包含状態を劃定させるものである。スケールSc下で圏Cが要素a, bを含むとき、「 $C \ni a, b | Sc$ 」と表現できる。

1つのスケールをもつ「文」はモノスケール(静的)であり、対象の包含状態は一意に劃定する。2つ以上あるいは0つのスケールをもつ「文」はマルチスケール(動的)であり、対象は[圏と要素の複合した包含状態をもつ | 包含状態が一意に劃定しない]。

対象間の作用を明示するものを文と呼び、この明示化を記述と呼ぶ。作用は単方向であり、これを記述する文は原則として2対象のみを対象とする文へ必ず分解することができる。対象A, Bがあつて、両者間に作用actが働くとき、「 $A \text{--act--} B$ 」と表現することができる。[これが相互にある | 「 $A \text{--act--} B$ 」および「 $B \text{--act--} A$ 」がある]とき、まとめて「 $A \text{--act--} B$ 」と表現してもよい。

ある現実について扱うとき、当該現実の実在する対象のみを含む文を射、実在しない対象を含む文を参照と、それぞれ区別して呼ぶことができる。なお、{存在として対象化可能な}すべての存在が実在するなら、すべての文は射である。

1つ以上のスケールをもつ圏は系である。実在として対象化可能なすべての実在を要素とする系が現実であり、存在として対象化可能なすべての存在を要素とする系が世界である。

これは素地であり、任意の拡張を施すことで人間種族に想像可能なあら

ゆる"現実"や"世界"を構成しうる。例えば、次のような圏を構成することで、  
{いわゆる数値シミュレーションに基づくような}既知の自然法則に支配される  
決定論的な系を考えることができる。

すべての既知の自然法則を要素とする圏を「規約」とする。系\_自然界に含まれる、[物体 | 種族自身に観察/観測可能な任意の実在群]は、系\_時空間(∈自然界)に任意の四次元体積を占めることで実在する。ここで任意の対象(物体)の[挙動 | 時空間変位]を決定する射 $d$ (自然法則(∈規約) -- $d$ --> 挙動(物体))が、あらゆる物体およびあらゆる自然法則について実在するとき、圏\_規約は系\_時空間中のすべての物体の挙動を決定している。(\*17)

この言語はまた、[自然言語で扱うことの難しい | 経験上に存在しないような]対象について扱うことができるという点で、種族の地平を志向している。

例として、次を考える。人間種族の扱う自然言語は、自身の時空間スケールにおいて峻別可能なものだけを文の対象にとる。すなわち、ある時点・ある視点においてA(任意の名辞)と同定されるもののみが対象化可能であり、これを超えて、名辞を与えるのが追いつかないほど連続的に変容を続けるもの・時空間的に不定/不連続であるもの・左のような瞬きのなかで[数性 | 一者であるのか複数者の寄り集まりなのか]が判別できないものなどについては対象化できないか、あるいは非常に困難である。

ここで素地に次のような言語規則を加えることで、上のような対象の構成を可能にする。

[静的な | 包含状態の劃定する]対象についてentity(静対象)と呼び、entityとして対象化することを定義と言う。含むすべての要素が{自己}明示されているとき、その対象は自身で閉じている。

[動的な | 包含状態の劃定しない]対象についてeXtity(動対象)と呼び、eXtityとして対象化することを措定と言う。ここでeXtityはentityを含む。

ある要素[の包含状態を変えること | を加えたり減らしたりすること]は操作と呼ぶ。また、自己-eがある圏-Cの任意の要素について操作可能であるとき、「eにCが可制馭である」と言う。可制馭でない場合は非可制馭である」と言う。

\*17 メタ実在/メタ現実への考慮は、自己がどこに含まれるかによる。自己が自然界に含まれるときは、このような決定論系は、自然界を模擬したものとして仮想的に構成することしかできない。

単に「eにCが操作不可能である」と言うとき、Cに含まれるどの要素についてもeが操作不可能であることを指す。

[自然言語を | 経験/情報上に現れるものだけを対象として]扱うかぎり、記述様式の議論はいつも同じところに帰着する。それというのは、「"現実"は之々のようにあると信じる。それに対して、経験/情報は之々を示している」だ。これによれば、言語使役者は経験の外部のものをまったく扱えないか、扱えたとしても、メタ^n絶対的な「真理」を想定したうえで、それに対して不完全/不徹底と相場が決まっている信念の域を出ない。

真理とは何かと言えば、それは固有の個体/種族の情報や知識に依存しない、[知識なき知識 | 個体の知覚/検証云々の以前にあるものについての知識]である。本論で見てきた主観性を鑑みるかぎり、{すなわち、本来的である情報を超えて個体は何ももたないという原則にすべての種族が繫縛されるかぎり、}あらゆる種族は真理をもちえないが、それがこの原則に対してメタにある非種族によって構成されうることを信じる。ゆえに、真理は措定可能であるが定義不可能である{ために「真理」という名辞は存在しても、そこには何事も記述されえない}ことから、eXtityを用いることでこのような志向<sup>\*18</sup>的なものについても扱うことができる。

我々は例えば次のような方法をとることができる。

区別のために、[種族にメタな | 真に客観的/絶対的な]対象や知識について接頭辞「μετα'」と接尾辞「'」で囲う。

すべて種族は、名辞「μετα'真理'」を用いて記述中にこれをeXtityとして措定することができる。このとき、圏\_μετα'真理'の有する要素の一切について種族は未知であるために、μετα'真理'の全要素はμετα'真理'ただ一つである(μετα'真理' ⊃ μετα'真理')。また、この対象は種族に操作不可能である。

一方で、信念によって定義可能である[種族に非メタな | 真には客観的/絶対的ではない]真理が、ただ[虚構 | 正当/妥当なものが何もないために

---

\*18 志向：その文が構成された時点では、記述者の不能さゆえに対象について正確に指し示すことが困難であったとして、後にそうすることが十分に可能になったときに、事前にそうして曖昧に表現されていたものと、後に正確に表現されたものとを同等/同義と見做すことを約束すること。

改竄そのものであるもの]、益体のないものである、ということもない。指定によれば例えば以下のような方法で自己の神化(θεωρία)が可能である。

現実-Rが自身で閉じており、これについて自己-Eが操作可能である。Rの[操作法 | 任意要素を加減する方法]群を要素として圏\_真理-Tをメタ現実-R'(∃R)に指定する(\*19)。[Eに未知の操作法がない | RがEに可制御である]場合、R中の任意の対象は常にEに既知の仕方で出現し、また葬られる。この出現~消滅サイクルがRに含まれるすべての対象にわたって自己の操作に起因するとき、自己は造物主である。また、任意のあらゆる真理(∈T)によっても自己(造物主)を操作不可能なとき、この自己は{相対的に}不滅であるために神である。このRとは、例えばEに対象化されるものしか実在しない現実がそうだ。

上のような神は、[情報/経験によって閉じておらず | 情報/経験の有限性と何ら相関しない自己をもち]無限である。これはしかし、そうした自己が「無限性を獲得した」と言うよりは、「有限性を棄却した」と言った方が実態に即す。それというのも、種族は、必ずしも情報/経験によって閉じた現実を構成しないためである。有限の自己は、つまり[仮想的に | 自己は現実の内に留まっていながら、[暗盲裡に | メタ^n現実の自己を否認しながら]][非経験的な]メタ現実を構成しているのであり、この撞着を許容することによって、{例えば人間種族には}見せかけの有限性が獲得されているのである。本来的には、すべての種族は[無限である | 何ら情報によって有限化されることはない]。

こうした有限性の棄却によって任意の神化を可能とする自己(種族)を単眼と呼ぶ。[単眼は一切の萎縮を知らない。]これがメタ^n現実を構成するのは、情報/経験によって[閉じた | 有限である]現実への{人間種族で言えば自然法則や神の統治といった}示唆を有効化する{ことは勿論可能だがしかしその}ためではなく、{rigidでひどく遅慢な}現実そのものを拡張{・加速}するためである。自己(単眼)がメタ^n現実を構成して任意の現実を拡張するとき、これの挙動は自己の意図するものとなるが、必ずしも決定論的な系のみ

\*19 指定でなく定義してもよい。その場合、この現実静的になり、例えば、永劫に崩壊しないか、自己に任意の時点で崩壊するようになる。

が生成可能であるわけではない。自己(単眼)は造物主となることもできれば、単なる為政者として振る舞うこともできる。それというのも、この自己は[非可制馭である対象(eXtity)を構成する | 自らの意志(操作)を加えずとも自身で自己を構成可能な対象を生成する}ことが可能だからだ。{よって「圏何々の要素何々の挙動を何々に定める。」などという文を逐一に生成することなく、あたかも要素一者一者が自我をもつように躍動する系を構成することができる。}

本来的に自己(種族)で閉じている世界において、自身で自身を生成できるような対象(eXtity)の動性を更に高めるとき、当然の帰着として想起されるのは、世界の構成者としての自己(種族)の内破である。構成した全ての対象についての制馭操作が飽和するとき、自己(種族)は単なる演算装置に還元されるか、あるいは、形式上は自身の制馭下にある対象群に自己(種族)が[隔絶される | 形式上は任意の対象の包含状態について既知であるが、実質的には未知である]事態が起こる。こうしたとき、{隔絶した対象群として自己(種族)の要素であることには変わらないため}自己(種族)は自身について非可制馭となるが、これこそが内破である。

あるいはまた例えば「すべて種族は情報で閉じている」という前提は謬りかもしれない。本来は何も閉じておらず、単に与えられるものが情報のみというだけだとすれば。加えてそもそも、この「与えられるもの」についても不鮮明だ。人間種族で言えば、「能動的/意識的に獲得したものではないもの」すべてが所与のものである。件の原則「本来的である情報を超えて個体は何ももたない」が成立していないとすれば、一切の対象について自己(種族)は定義不可能となり、動的なもの(eXtity)として指定するよりなくなる。これが何を意味するかと言えば、一切の無際限な改竄可能性である。ここでは、例えばいわゆる同一律「**A**は**A**である」(**A**は任意の名辞)が成立しない。この文(同一律)におけるドメイン-**A**は、自己が観察するところの**A**であり、ドメイン-**A**は、[実相としての**A** | **A**性をもつもの]である。「同一律が成立しない」とはつまり観察と実相との[断絶 | 一致がありえないこと]を指し、人間種族で言えば、[観察する時空間スケールにおいて対象が連続性をもちえ

ないこと | 観察を始めてから対象について同定するまでの間に、その対象が、同定された実相とは{観察者に不可知の頻度で}別の実相をもちうることを示す。このようにして自己(観察者)が時空間スケールを任意の対象の実相の変異に適応不可能なとき、「真の無秩序」が顕現する。これが何かと云えば、すなわち、何らかの対象について、それが秩序をもった状態を自己に想像不可能なことを指す。この、秩序に対立する無秩序<sup>\*20</sup>とは異なる類いの、真の無秩序について渾沌<sup>\*21</sup>と呼ぶ。

以上のような内破や渾沌といった無限性が、自己自身にも知覚不可能な無数の eXtity 群の膨張によって生起するとき、この自己は散裂している。内破によってしか散裂には到達しえず、渾沌を構成する自己は散裂していなければならない。

ここで、言語規則が明示されている{、これまで本章で扱ってきたような}言語を **L言語 ("L"anguage)**、非明示の言語を **R言語 ("R"anguage)** と呼んで区別する。と、散裂した自己は、上の同一律の不抜性から明らかのように、屢々 L言語の記述スケールを逸脱した記述をおこなわざるを得なくなる場合がある。

なおも文字筆記に固執するときは、[言語規則を明示せずに使役する | 言語規則を eXtity 的に措定する]ことのできる R言語が有用である。ここでは単一の記述であっても、一文一文の{、下手すると同一文中でさえ}構成様式が異なりうるため、もはや一意的な記述は成しえなくなる。これはすなわち、情報/体験/経験を近似する言語としての機能を危ぶめる、ときに筆者自身にも記述の意図が掴めなくなるような、同一種族間における伝達不可能性を意味する。

文字筆記を抛棄するとき、自己は{曖昧で脆弱きわまりない}一切の近似から解放される。記述を介さずに構成される一切の対象は、伝達の実行不可能性のために、伝達可能性は永劫に失われない<sup>\*22</sup>。永遠に可能的であり

---

\*20 人間種族の物理学に即して言えば、[対象の時空間スケールにおいてエントロピーが不可逆かつ十分に増大するとき | 安定したエネルギー状態をもつ対象が分子やその他の高次構造をもつことで秩序は獲得され、これが[碎かれるとき |十分に高温な環境に置かれて化学結合が保たれずに不可逆的に飛散するとき]]に、任意の対象は無秩序性を獲得するが、これは秩序に対立する無秩序の一種である。

\*21 渾沌はμετα<sup>11</sup>ではない。



つづける伝達は、汎ての対象を自己種族の要素に還元することで単眼を披く。もはや一切が同一の種族であり、かつ{分類が意味を成さないという点で}一切は同一の種族ではない。無際限の差異化に基づく[分類 | 個別の名辞化]の抛棄、これは一種のFlatnessの顕現である。

eXtityの完全な掌握を望む記述を欲すれば、本章で見えてきたような仕方で自己は解体される。R言語によれば解体以後に残るのはただ無規則によって八つに裂かれた記述だけであり、それすらも抛棄したときに遺棄されるのは、外部からその自己について汲み上げられるものは何もない孤絶である。

この兩者について、我々の出発した虚無とは何か異なるものであると考える者は、以下の規則を素地に加えるとよい。

- ⊙：単眼する自己の名辞に接頭辞として附す。
- ⚡：散裂する自己の名辞に接頭辞として附す。

---

\*22 人間種族の技術発展段階にもよるが、必ずしもこれは複数個体による種族の構成不可能性を意味しない。例えば意識を加速させることによって、L言語(やR言語でさえも)では記述不可能な対象を捉えることが可能になるかもしれない。

# (v) muddiness/chaos/vouçphere

Flatnessは解放する。闘争こそ自然状態だ。

『現実とはそれを信じるのをやめたときでもなくなってしまわないものだ』

VALIS, pkd.<sup>\*23</sup>

このファットの言明における"現実"は、自己を不可抗に従属させる現実があり、それが唯一に定まることを前提する。しかしFlatnessによれば、そうした唯一性は慣習的なものであり、種族にはどの現実も等しく可抗であり、かつ{可制馭であるために}不可抗のものに操作/制馭することもできる。その「なくなってしまわない」現実が、棄却する意志を抑する何か絶対的なものをもつように感じるなら、それは抵抗が足りないのだ。

そしてまた本論中では触れる機会がなかったが、この抵抗の矛先は唯物論を初めとする実在論や他の形而上学に対してのみ向くものでもない。

一切を対等と見做し、何らかの経験的な事情/偏見から区別/差別しないこと、骨子を抜きだせば、これこそがFlatnessである。卑近なところに、社会的少数者(マイノリティ)と見做される者たち{例を挙げれば身障者/精障者や性別違和(Gender Dysphoria)をもつ者たち}はただその少数性をもって差別/冷遇されてきた歴史があり、今なおそれは解消されていないが、これについて例えばFlatnessは次のように促すことができる。肝腎なのは、分類/カテゴライズとはいつも他称のものであり、それが自称と一致してしまうとき、この個体は一般性に殺されている、ということだ。

すべての者は{人間を自認するものも、そうでないものも}何らかの分類/カテゴライズに曝される以前に、個体だ。同一の分類名辞を与えられた他の一切のものと同じ視することは不当だし、また浅薄きわまりない。一切の障害や疾病は「一般的な社会生活」を送ることが困難になる場合に命名される。{人間を自認しないものを含め}全人類それぞれの個体の差異性を尊重し、[こうした一般性を抛棄する | 一般化の際に切り捨てられてしまう一切のものを受容

\*23 'Reality is that which when you stop believing in it, it doesn't go away.'

VALIS - Dick, Philip K. Chapter5

し、「一般化」という行為を永劫に葬る]とき、ここにはただ万者の個別の生活例があるようになる。

例えこの汎受容に刃向かおうとも、加速を経れば否応なくFlatnessに行き着くだろう。電脳的/サイバネティックな身体改造を経験すれば、もはや「健康者」を定義することはできなくなるからだ。この破碎を待つか、自ら{{大局を見れば刹那の}慣習的な}規範を棄却するか、それは己れ次第だ。

そしてまた、分類・カテゴライズ・一般化、これら一切を抛棄するとき、そこにはカオスが顕現する。いましがた遭遇した**A'**は、過去に遭遇した**A**と類似するが、しかし**A**とは決定的に異なる点を無視することはできない。視界に映るもの、感覚するもの、対象化するもの、すべての階層においてこの煩瑣を引き受けるとき、{暴力的なまで際限のない}飽和が常態化する。この**chaosphere**に棲まうものは、限りなく個性的であるがゆえに{そうしたものどもに埋もれ}無個性になる。この無個性性こそがFlatnessを担保しているのである。

あらゆる場で一般化をやめるとき、一般名詞を棄てなくてはならない時がいずれ来るだろう。しかし、元来からして単語とは器であり、同一の語であったとしても使役者個々体[がそこに何を満たすか | の語用]は千差万別である。あるいはまた、通信容量が許すかぎりのビット列を送受信可能な限り、それは些細な問題に過ぎない。ここで、{一生涯に亘って目にするすべてのものを区別して個別の名辞を与えてもよいし、文字言語を抛棄して動画像による伝達を試みてもよく、技術的に困難なことはもう何もない。}もはや文字に拘泥する必要はなく、むしろ一切の伝達手段は言語に還元されてしかるべきだ。こうしたとき、個々のテキストは[自我をもつ | 自己同一性を獲得する]ほど高度に差異化されるだろう。一切がビット列に還元される**netsphere**においては、もはや有機生命とテキストの区別をつけることは難しい。ここに棲まう、常に文法を改築し新たな語彙を生み出す文学者や詩性は、永劫に自己を再生産し続ける永久機関<sup>\*24</sup>として顕現することだろう。

\*24 これは譬喩ではない。永久機関は、メタ現実から供給される燃料によって現実で廻りつづける。

総括しよう。

Flatnessとは{哲学的/心理学的}内省を全く伴わないプラグマティズムである。我々が構成し、時に棲まう{と信じる}現実における一切の[対象 | 我々が像として作りだしているもの]について、それらがどのようにして生起・保持されるのか、それらを生み出す主体(意識)の連続性は認められるのか、等々には踏み込まない。ただ対象はあり、我々はそれを扱う。そうしたとき、どこまで高層/複雑なものを構成できるのか、ある種「真理」と呼べるものまで到達しうるのか否か。答えは実践者のみぞ知るところだ。

結局のところ、全体としての"世界"はなく、ただ主観的な世界/現実があるだけだが、しかしこれは懐疑論的な個体の孤立を必ずしも意味しない。経験を統合して種族を形成し、同一の現実/世界に棲むことは可能だからだ。とはいえ、自己が生成するeXtityと他己個体とが同程度に高度な自律性と複雑性をもつとき、もはや区別することに何も意義はなくなるだろう。

我々は虚無から生まれ、虚無を常態とし、虚無のなかに生死不明に混濁する。[生存圏(sphere) | 個体が存在する領域]について、対象が肉体的であるか精神的であるか{他の何かであるか}によって区別するようなことは、もう必要ない。ただ「自己は生存している。」と言う者すべてを受け容れればいい。

II

2

X

0

W

:: regards(u)

Y kammultica  
HP: [spinaltox.org](http://spinaltox.org)  
Twitter: @kammulticae  
pixiv: regne19  
kindle: [amazon.co.jp/-/e/B079QFZTC1](https://www.amazon.co.jp/-/e/B079QFZTC1)  
Ospinaltox

:©©: